

一般の部

最優秀賞

認知症の母が詠んだ俳句

すがぬま

菅沼 博子

認知症で施設に入所した母は、最後のひと月ほどを個人病院に入院し、そこで亡くなった。

施設に入る前には、お金を盗られたと大騒ぎしたり、徘徊をくりかえしたり、随分弟夫婦を困らせた。短期間の入院を繰り返したが、もう家では対応しきれなくなり、施設にお世話になったが、そこで七年間も過ごすことになってしまった。

その母が亡くなった後、母の部屋を片付けていると、多くの俳句を記したノートが出て

きた。母は若いころから俳句を詠み、句集も出しているが、認知症になった後も俳句を書き残していたとは信じられなかった。文字は乱れ、もう真直ぐに書けずに大きく傾いているが、確かに母の字だ。しかもそれは、明らかに施設に入ってから詠んだものだった。

施設に入った母を見舞うとき、母の認知度がどの程度なのか、ついそれを確かめたいと思った。黒板に書かれた文字を「あそこになんて書いてある？」などと意地悪な質問をすると「読めるに決まっているでしょ」と、母は笑いながら誤魔化した。

シャボン玉宇宙に散らばる百面相
クマザサの広がり椿どこよりか
しんしんと裸木ばかり雪降り

キラキラ光るシャボン玉を「宇宙に散らばる」と表現し、クマザサの中の椿を思い描いて詠んでいる。雪の中の裸木を連想すれば、

どの句も一幅の絵画の世界だ。母は絵の鑑賞が好きで、幼い私たち姉弟を何度も絵画展に連れて行ってくれた。今から考えると、遠くの町までよく行ったものだと思うが、子供の教育などと考えたわけではなく、自分がどうしても絵が見たいと思ったから出掛けたのだと思う。父は早く亡くなり、母子家庭の我が家では、子どもを連れて出かけるしかなかったのだ。痴呆の症状が出る以前に実家に行くと、いつも机に向かって俳画を描いていた。「やつと私の時間ができて嬉しいわ」と言いながら、真剣な表情で励んでいた。天津絵にも挑戦していた。入院中に、こうした色鮮やかな絵画を思わせる句を詠んでいるのは、いかにも母らしいと思う。

アメ舐めて正氣に戻る心地する

煎餅嚙む音カリカリと春の雪

子がくれる土産をひらく温かし

母は結婚生活四年で夫を亡くしている。理容師だった父の床屋を引継いだ母は、夜、仕事を終えると自室に戻り、本を読み、俳句を詠んでいた。疲れていたはずだが「もつと勉強したいのに、私には時間がない」といつも嘆くような人だった。しかし、施設に居る目の前の母は、もう全く別人だ。甘いお菓子を持つていくと、その時だけ、生き生きとした表情を見せる。食べ物で母のご機嫌を取るなどということは、それまで考えられなかったことなのに、一気に食べるように食べる母を見て、啞然とするばかりだ。

つくづくと狂女ばかりや春の雪

肩張らぬ狂女ばかりや仲良くす

春の雪われも狂女や母恋し

認知症について、「呆けてしまえば何も分らないから、本人はいいが、面倒見る周りの者が大変だ」などと言う人がいるが、それは

違う。頭に霧がかかったように、今の自分が分らないと苦しむ母の姿があつたが、突然その霧が晴れるときがある。頭が明瞭な時と、正常な判断ができないときが、交互にくる。

そのために、どこまでが本気なのか、どこかで演技をしているのかなどと、私達はそれに振り回された。正氣に戻ったとき、今の自分を思い知らされ、一層深い悲しみに落ちていく姿を、何度も見ている。「われも狂女や」と、施設の部屋でひとり句を詠む、母の絶望感が伝わってくるような句だ。

幸福と患者たてまつる老婦長

看護婦の白衣にめげず雪降れり

早春や看取りめの看護きりもなし

施設で働く人々を詠んだ句も多い。結婚前に看護婦をしていた母は、自分が看護婦に戻つたような錯覚を起こしていた。「みんなのお世話をしてくれと院長先生に頼まれたの。

でも、わけの分からない人ばかりで大変なのよ」などと言うが、その顔は生き生きしていた。昔の九州大病院で看護婦をしていたころが、母には楽しい時代だったのだろう。それに比べ、三〇年以上も生活を支えてきた床屋家業を詠んだ句は一句も見られないし、会話の中でも一言も触れたことがない。夫に先立たれて、しかたなく継いだ床屋稼業だったが、最後まで氣に染まないものだったような氣がする。

度忘れの患者に過去なし春の雪

花咲いて老婆泣きおりこの世かな

春眠や醒めて一人となり到る

入院中の句に一番多いのは、こうした孤独を詠んだものだ。ただ思考がストップしたような我が身をひたすら嘆き、その現実に対峙している句は、やはり凄い迫力を感じさせる。その孤独の深さ、恐ろしさがひしひしと伝わ

ってくるようだ。

それにしても、あのころ母が俳句を詠んでいたことを、私はどうして気づかなかったのだろう。ノートをしながら、わが身の愚鈍さに、身を引きちぎられるような思いがした。心を込めて見舞っていたら、母の心が見えただろうか。こうして、八十句近くが記されているのに、母が句を詠んでいることを、このノートを見るまで全く知らなかった。

母が発症したのは昭和の時代で、認知症を隠すという風潮が、まだ色濃く残っていたころだ。私も弟も、厳しい暮らしを通して、社会に抗うような生き方をしてきた。そのため、認知症の母を隠そうとする意識はなかったと思っているが、認知症の情報は今よりずっと少なかった。

入院中の母との会話の中で、俳句のことを思い出してほしいと水を向けても、母は一切反応しなかった。施設に入る前の母は相当に

荒れており、やむなく入所という決断をした私と弟だったが、それで良かったのかという負い目がいつも心にあった。母に黒板の字を読ませようとしたのも、字の読めない母を見て、「やはりここに入ってもらうしかなかった」と自分を納得させるためだったのだ。初めのころは、娘の私を認識していたが、やがて「お世話になります」などと、おどおどと他人行儀に挨拶するようになった。そんな仕草を見るたびに、母を「もう壊れた人」と決めつけてしまった。そう思うことで、私の負い目が軽くなっていったのだ。

勉強家で、努力家の母が、あれほど頑張つて生きたのに、報われない晩年だった。学び続けることが、本当に人生を意味あることにするのだろうか。母の死後、私は、そうした思いにずっと囚われ続けた。

亡くなって一〇年以上過ぎたところから、認知症の研究が進み、認知症患者の立場から考

える視点が出てきている。ドキュメンタリー映画の女性監督が、認知症の母親の姿を映し続けている番組をテレビで観た。偶然目にした番組だったが、私はそれに釘付けになった。それまでできていた日常生活のあれこれができなくなり、明らかに認知症の症状を見せ始めている母親の姿を、淡々と、むしろ一緒に楽しんでいるとさえ思わせる様子で映していた。カメラを回す娘の「ちよつと呆けていると思いますか」という問いかけに「そうかもな。けど、あんたほどではないで」と笑いながら答える母親。患者の姿をあるがままに写す映像を、私はその時初めて見たような気がした。新鮮な感じを放つそれに、私は大きなショックを覚え、私にはこれが欠けていたのだと気づかされた。

私は、認知症の症状が出た時、母を「壊れた人」と決めつけてしまった。しかし、最近では、認知症になって出来ないことが増えたとしても、出来ることはある。それを大事に生

かせば、その人らしく最後まで暮らせるという考え方が注目されてきた。そう考えれば、母の句はまさにそれを物語っている。絵のよいうな句を詠み、看護婦時代を思い出し、母は、それまでの人生をもう一度生きなおしていたのだ。あの女性映画監督のように、目の前の母の姿を無心で観察していたら、母の心の内に気づいたかもしれないのに、私が母を見放していたから、見えるものも見えなかったのだ。施設での期間が長くなるにつれ、お見舞いに行く回数も少なくなっていくた。私が誰とも分かってくれず、他人行儀に挨拶する母を見るのは空しく、行かなければいけないという義務感で見舞いに行っていた。今になって、様々に深く後悔し、時間が取り戻せるものならばと思うのは、余りにも辛い。

母が遺した句集を、亡くなった後、何度も開き、生前交わせなかった母との会話を繰り返している。「努力家の母の一生は報われな

かった」と、死後ずっと思い続けてきたが、年老いた今「母の一生は無意味ではなかった」と思うようになっていく。最後まで俳句を詠み続け、見事な一生を生きた母の姿は、今も私を叱咤激励してくれる。そして私と共に生きてくれているのだと思えるようになった。

（愛知県新城市）

【無断転載を禁ず】